



草刈K区725号住居の貝層



卜骨(1)



卜骨(2)



加工した亀の甲

# 市原市草刈遺跡出土の卜骨について

花島理典、田井知二、西野雅人

## 1. はじめに

草刈遺跡は、市原市草刈に所在し、住宅・都市整備公団千原台地区の土地区画整理事業に先だつて、昭和53年7月から現在に至るまで発掘調査が継続して行われている。遺跡の面積は約30万㎡あり、先土器時代から歴史時代までの様々な遺構・遺物が検出され、複合遺跡としても著名である。中でも、特に弥生時代から古墳時代にかけての住居跡と古墳が多く検出されている。

今回ここで出土した卜骨は、過去の遺跡の出土例をみると最近全国的にかなり増加しているものの、千葉県内では5例目と少なく、貴重な出土例であると考えられる。そのため、古代の風習・文

化を考える意味で大切な資料として資料紹介という形で、より多くの方々にご教示を頂ければ幸いと思い、ここに紹介することとした。

## 2. 遺跡の位置と環境

草刈遺跡は、東京湾に注ぐ村田川とその北側の支流に開析された標高30m前後の東西に細く延びる台地上に広がっている。主な遺構をあげると、弥生時代中期の環濠2条が遺跡の西端部に、また、それに隣接するかたちで後期の環濠が2条検出されており、総延長は約600mになる。弥生時代の住居は遺跡中央部から西端部にかけて分布しており、その数は現在までの総計で約800軒となっている。



第1図 遺跡の位置 (1/50,000 蘇我)



第2図 遺構の位置 (約1/8,000)

また、弥生末期から古墳時代初頭の小銅鐸2個が出土している。古墳時代では、住居が約1500軒、古墳は約180基検出されている。

周辺の遺跡をみると、同じ台地の南西部には先土器時代から奈良時代にかけての複合遺跡である川焼台遺跡、村田川の対岸には弥生時代中期の環濠を持つ集落が検出された大厩遺跡と、弥生時代中期の集落と方形周溝墓などが検出され、その内1基の方形周溝墓の周溝から弥生時代中期の卜骨が3点出土した菊間遺跡、そして弥生時代の環濠の一部が検出された潤井戸西山遺跡などがある。

### 3. 調査の方法と卜骨の出土状況

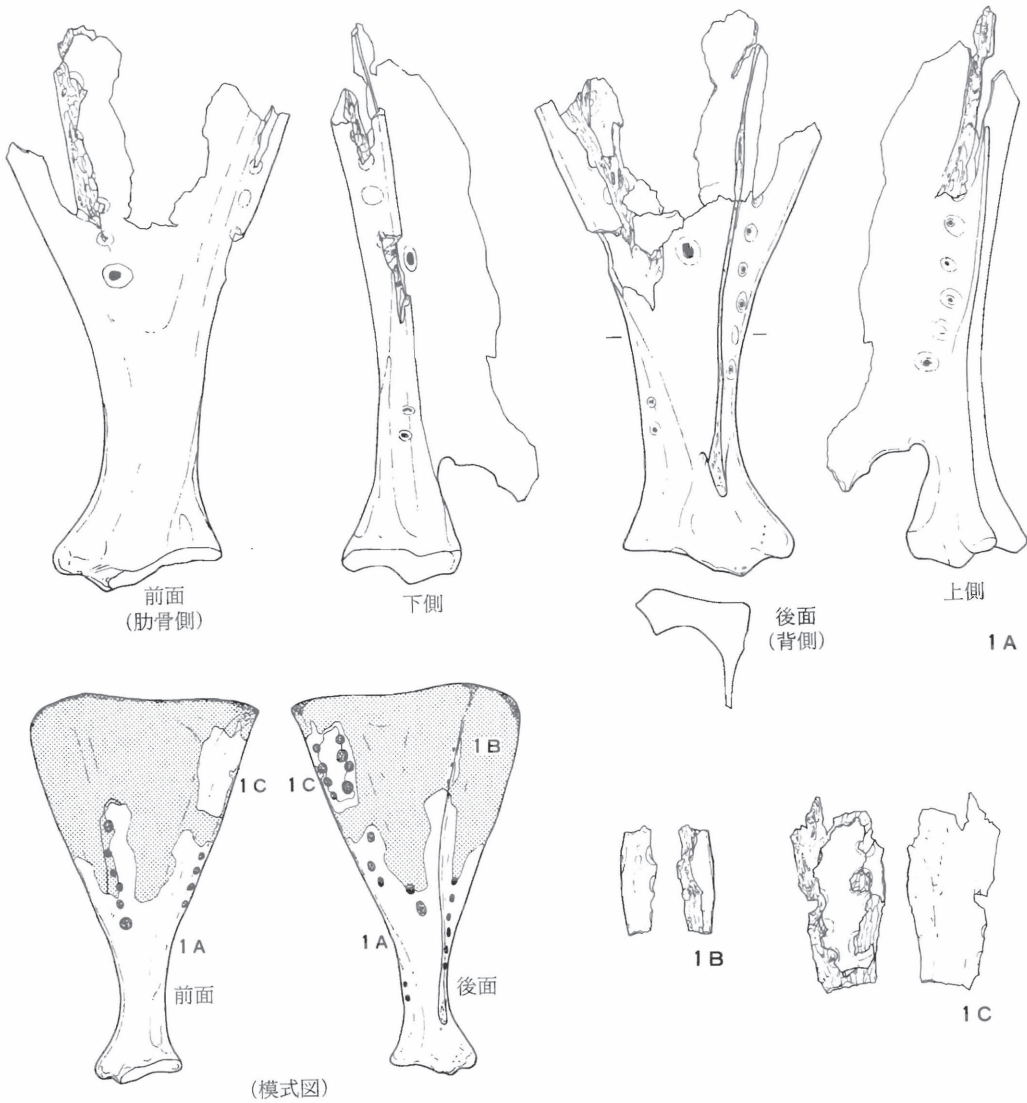
平成6年度は、調査区域をL区として行い、平成5年度はK区として調査を行った。しかし、当遺跡は隣接した区域を継続して発掘調査しているため、連続した遺構の調査を行う上で当該年度の調査区域の線引きが直線的に行えない状況がある。このため本年度調査したところでも、前年度のK区の遺構番号を付与して調査したところが、数カ所あった。今回卜骨の出土した住居も今年度調査したがK区の遺構番号である725号を付与している

ことを前置きしておく。

次にこの住居を検出した経緯について述べることにする。まず、50~80cm程度あった表土を除去した時点で、長径約1.5m、短径約1mほどの貝層が確認できた。

しかし、ジョレンで精査していくうちに土器片が多く出土し、遺構の輪郭が十分には確認できる状態にならなかったため、貝層にかかるように十字に幅40cmのベルトを設定し、その両脇に30cmのトレンチを入れて住居の床面及び壁面を検出することにした。その結果約30cm程掘り込んだところに床面が検出できた。しかし、そのトレンチで床面が検出できたのは僅かなところで殆どところは貝層や土器等があって確認できなかった。土層セクションをとった後に住居の覆土を除去した。そして、この時点で、住居の時期が、いわゆる小判の形をした弥生時代後期の住居跡であることが確認できた。また、貝層が長径3m短径2mほどの楕円形をしており、その厚さが40cm程度のものであることも確認できた。

その次に、貝層の堆積状況を調査するために貝層の長径の部分でセクションをとることにした。



第3図

その調査途中で、貝層中に土器片ばかりでなく、  
 獣骨等も多く出土していた。また、セクションを  
 見ると二次的に堆積した貝層である可能性をうか  
 がうことができた。それは、①貝や土の混じり方  
 が貝層全体にわたって均一的で、分層できないこ  
 と②貝の堆積方向がランダムなことによる(註1)。

そして、口絵カラー写真(草刈K区725号住居の  
 貝層)の状態が残った貝層でコラムサンプルを採  
 取した。それは、セクション面中央部の50cm四方  
 を5cmの厚さに区切って、その層中にあるすべて  
 の貝を採取しビニール袋に入れるという方法をと  
 った。その貝の分析については、事務所の中で行  
 った。

以上が、貝層調査に関する概要である。

#### 4. 出土した遺物

当住居の覆土からは多種多様な遺物が出土して  
 いる。

##### (1) 土器

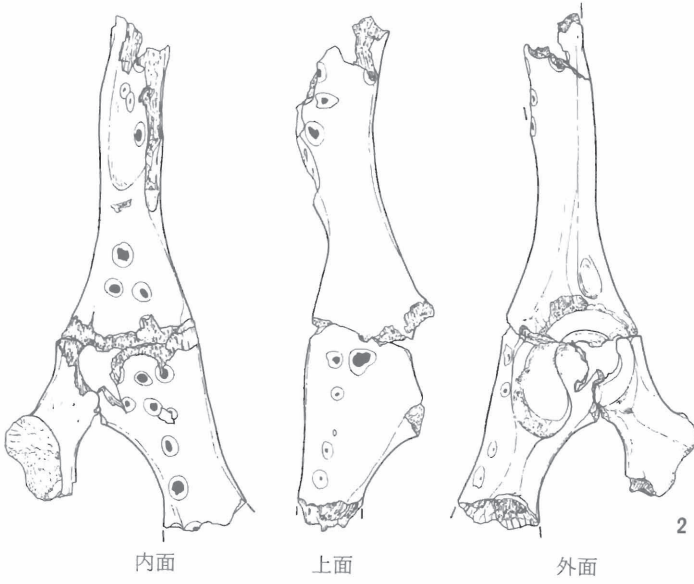
弥生時代後期と古墳時代前期の連続しない2つ  
 の時期の土器が入っていた。出土状況も含めて次  
 の節に記した。

##### (2) 石製小玉

貝サンプルのなかから、安山岩製の径約5mm・  
 高さ約5mm・重さ0.12gの小玉が見つかった。両  
 小口・側面ともていねいに研磨され、白玉と管玉  
 の中間ぐらいの長さには仕上げられている。

##### (3) 卜骨と骨角製品

卜骨2点と、骨角器数点が出土している。骨の  
 種・部位同定は国立歴史民俗博物館・西本豊弘助  
 教授にお願いした。また、観察や実測に関しても



内面

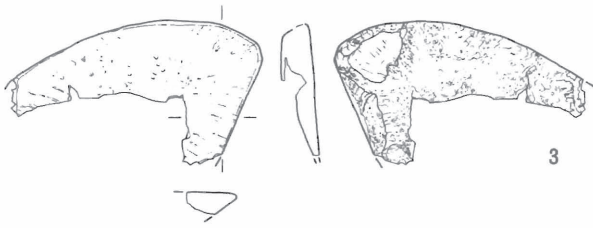
上面

外面

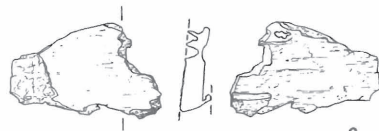
2



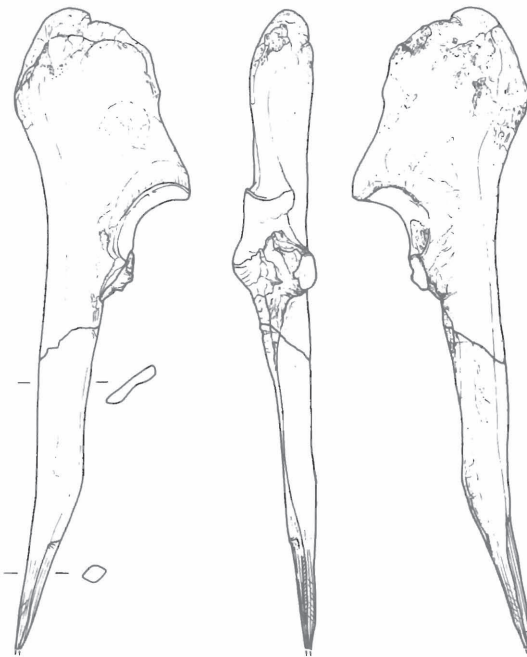
4



3



6



5



7

2 ~ 6 1/2  
7 2/3

第4图

ご指導していただいた。

1はニホンジカの成獣の右肩甲骨を素材としたト骨である。肩関節の側の2分の1程度の破片(1A)と、小さな骨片2点(1B・1C)がいっしょに出土している。出土状況から骨片も同一個体とみられる。第3図の模式図に3点の位置関係を示した。1Cは現生ニホンジカの標本と比較した結果、粗面(筋肉の付着部であろう)の位置を照合することができたので、かなり正確な位置を復元できたと思われる。一方、1Bはやや不安が残った。ただし、同一骨の一部とみて良いなら、肩甲骨の一部以外には考えにくい。この推定復元は、将来より正確な照合を行う必要を感じるが、今回は模式図のようであったとして報告する。

焼灼は残存部で33ないし34か所加えられている。灼痕は列状をなしている部分が多い。灼痕の数はこれまで発見された資料のなかではかなり多く、模式図をみれば、本来はさらに多数加えられていたとみるべきであろう。

2はニホンジカの若獣の右寛骨を素材としたト骨である。腸骨・坐骨・恥骨の結合部分の骨化が不完全で、1歳位とみられる。焼灼は比較的平坦な腸骨・坐骨の両面に、全部で28か所加えられており、ほぼ列状をなしている。腸骨・坐骨とも、さらに欠損部分に焼灼の列が続いていた可能性が高い。

以上、発見されたト骨は2点である。いずれも素材を特に整形せずに使っている。灼痕の形状もよく似ている。しかし、2つの骨の年齢が異なるので、別個体のシカの骨である。ところで、寛骨はおそらく軟骨で結合していた部分が離れずに使用されたとみられるので、わりあい新しい骨を使ったことになる。

3と6は亀の甲である。3はウミガメ類の腹甲とみられ、2か所に見える縫合の凹凸が完全に失われるほど、周囲が磨り減っている。一部は断面図のように斜めに加工されており、金属で切断したような平坦な面が形成されている。6はとくに加工はみられないが、参考に取り上げた。若干3よりも厚みがある。亀甲は、ト骨とならんでト占に用いられたト甲の素材である。今のところ、ト甲の発見例は神奈川県間口洞窟遺跡の3例と長崎県志多留遺跡の1例に限られている。いずれも古墳時代後期のものであり、その起源が弥生時代に

さかのぼる証拠はない。今回発見された亀甲がト占用であったかどうかは何ともいえないが、加工された亀甲がト骨に伴っていたことは興味深い。

4はニホンジカ中足骨製棒状製品である。先端が失われているのははっきりしないが、基部加工をもつので、ヘラなどの工具よりはヤス状刺突具などの可能性が高い。素材の中足骨をほぼ半分に擦切り、切断して取っており、その後切断面をていねいに研磨して仕上げている。注目したいのは切断の際の素材の取り方が、縄文人の方法とは異なっている点である。

縄文人はシカの中手骨や中足骨から骨角器の素材を取るとき、これらの骨に特徴的な縦方向の溝に沿って擦切を行うこと(縦割)が多い。ヘラ状製品のなかには横割のものがあるのだが、その場合は特徴的に打欠きによっていることが『骨角器の研究縄文篇I』(金子・忍澤1986)に詳しい。

5はニホンジカ成獣の左尺骨製刺突具である。加工されているのは遠位端のみである。先端の近くは断面四角に研磨されている。同様の製品は縄文時代にもよく作られている。

7は鹿角製品である。残った形状からすると、鏃・銛・ヤスなどの尖頭器の基部であろう。図にも示したように、欠損面の近くには、横方向のくぼみ、キズが数多くみられる。おそらくは柄に括りつける際のすべり止めであろう。キズはきわめて鋭利な刃物でつけた様子がうかがえる。

#### (4) 貝類

長径3.3m・短径2m、最厚部で50cmほどの大きな貝層から、ごく一部コラムサンプルを採取している。貝層の中心部1か所で10カット(単位)採取した。現地では50×50×5cm=12.5リットルを1単位として採取したが、カット1とカット10は定量ではない。参考として、水洗前にマスで計量した値を貝種組成グラフに示しておいた。堆積時に比べて若干かさが増えている。

今回同定できたものは、種名がわかったもので22種ある。このほかにタニシ科の一種もみられた(註2)。

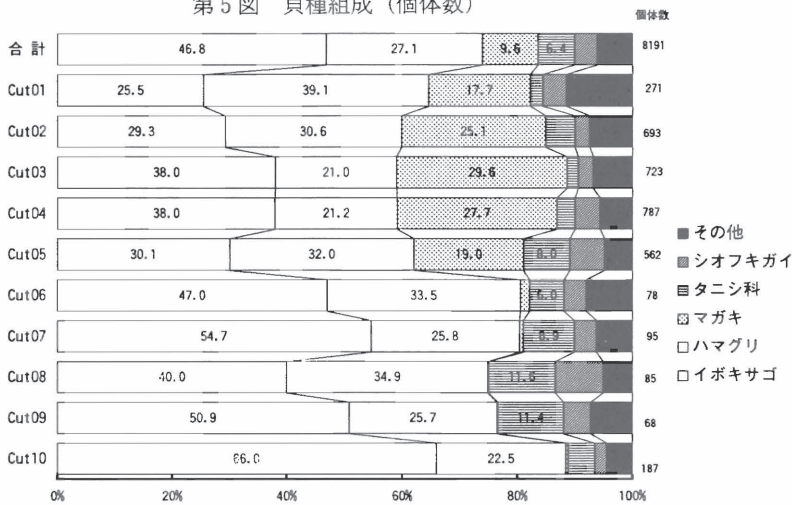
組成については個体数と重量およびその比率を算出した。ここでは紙面の都合で細かいデータは省略して、個体数でみた組成グラフと、生息域別の組成表を示した。これを見ると、かなり多くの種類から構成されていることがわかる。

表1 生息地別にみた貝類組成（個体数）

生息域	種名	個体数	食糧/混入	備考
内湾砂底	イボキサゴ	☆ 3834	食糧	かき集め採捕によると考えられる
内湾砂底	ハマグリ	☆ 2222	食糧	
内湾砂底	シオフキガイ	○ 325	食糧	
内湾砂底	ウミナシ	○ 208	混入?	かき集め採捕で混入か
内湾砂底	アサリ	△ 85	食糧	
内湾砂底	アラムシロガイ	△ 53	混入	かき集め採捕で混入
内湾砂底	マテガイ	△ 50	食糧	特殊な採捕法が必要、単独で採捕したはず
内湾砂底	カガミガイ	22	食糧	
内湾砂底	アカニシ	15	食糧	
内湾砂底	ツメタガイ	7	食糧	
内湾砂底	ヘナタリガイ	4	混入	かき集め採捕で混入
内湾砂底	ムシロガイ	1	混入	かき集め採捕で混入
内湾砂底	バカガイ	1	食糧	
内湾砂底	バイ	0	食糧	
内湾砂底	サルボウガイ	0	食糧	
湾奥干潟	マガキ	☆ 790	食糧	
湾奥干潟	スガイ	6	混入	カキ籠に付着か
湾奥干潟	ウネナシトマヤガイ	4	混入	カキ籠に付着か
淡水	タニシ科	○ 521	食糧	淡水貝の利用盛ん
淡水	カワナナ科	△ 35	食糧	
淡水	マツカサガイ	1	食糧	
汽水	ヒロクチカノコガイ	1	混入	
合計4水域			8191 個体	

☆主体-○多い-△やや多い。種名のゴシックは食糧と考えられるもの。

第5図 貝種組成（個体数）



まず全体でみると、主体となるのはイボキサゴ・ハマグリ・マガキ・タニシ科の一種・シオフキの5種である。個体数ではイボキサゴが最も多く(46.8%)、重量ではハマグリが圧倒的に多い(74.7%)。この傾向はイボキサゴがとて小さな貝であることによっており、縄文時代の貝塚などに比べて二枚貝がとて大きいために、より個体数と重量の差が極立っている。この5種以外ではウミナシ属・アサリ・アラムシロ・マテガイがややまとまって検出されている。ただし、ウミナシ属とアラムシロについては縄文貝塚でよく言われているように、イボキサゴに混じって運び込まれた可能性が高い。

生息域からみた組成 生息域からみても多様で

あり、何か所もの水域から採取している(表1)。主体は内湾の砂質底の海岸で採取できるものであり、これに次ぐのが湾奥の干潟で採れるマガキである。淡水域の貝はこれらには及ばないものの、村田川下流域の縄文貝塚の貝種組成に比べると、かなり多いといえる(註2)。これは水田の拡大による傾向であろうか(註3)。

カット別の組成の変化 マガキがカット1~5の上層に集中している。逆にタニシは下層に多く、とくにカット5~9に集中がみられる。とはいえ、全体にみると変化が少なく、個体数の少ない種でも全カットに少しずつ入っているケースが目立つ。つまり、各カットに多くの種が混じり合っているのが特徴といえる。これは現地では貝層を分層でき

なかったことと矛盾しない。一度廃棄したものが集められ、まとめてこの住居に投入されたものであることは、この貝種組成からも想定できる。

#### (5) 鳥獣類・魚類

動物骨は発掘中に発見した「手掘り」資料と貝サンプルに入っていた資料の2つがある。現在のところくわしい分析を終えていないが、手掘り分について国立歴史民俗博物館・西本豊弘助教授に見ていただいた。その結果、少なくとも海ガメ類・カモ類・イノシシ・ニホンジカ・キツネ・イヌ・サルが入っていることがわかった。ただ1軒の住居に入っていたものであるから、この組成はとてもバラエティーに富む内容といえるだろう。量的には破片数でみるとニホンジカ・イノシシの順に多い。

一方、コラムサンプルからは魚類（たとえば2mmメッシュのフルイに残る程度の椎骨10数点）や、きわめて小さな獣類、ウニ類が選別されている。いずれも量は少ないが、魚骨の出土から漁撈の存在もうかがうことができる。

### 5. 貝層の時期と出土土器

725号住居では調査中から弥生時代後期と古墳時

代前期の土器が混在していることが指摘されていた。完掘された遺構の形態は草刈遺跡における弥生時代の竪穴住居の一般的な形を示していたので住居として機能していた時期と覆土が形成された時期にズレがあることが予想された。当初は「住居は弥生時代後期、貝層は古墳時代前期」というのが大方の見方であった。

#### (1) 覆土の内容 (第6図)

貝層以外の覆土の主体は暗褐色土である。土層断面図からみた覆土の堆積順は次のようであったと推定される。

I 壁際の暗褐色土と褐色土(4層)が堆積。

II 床面上に暗褐色土(3層、6層)が堆積。

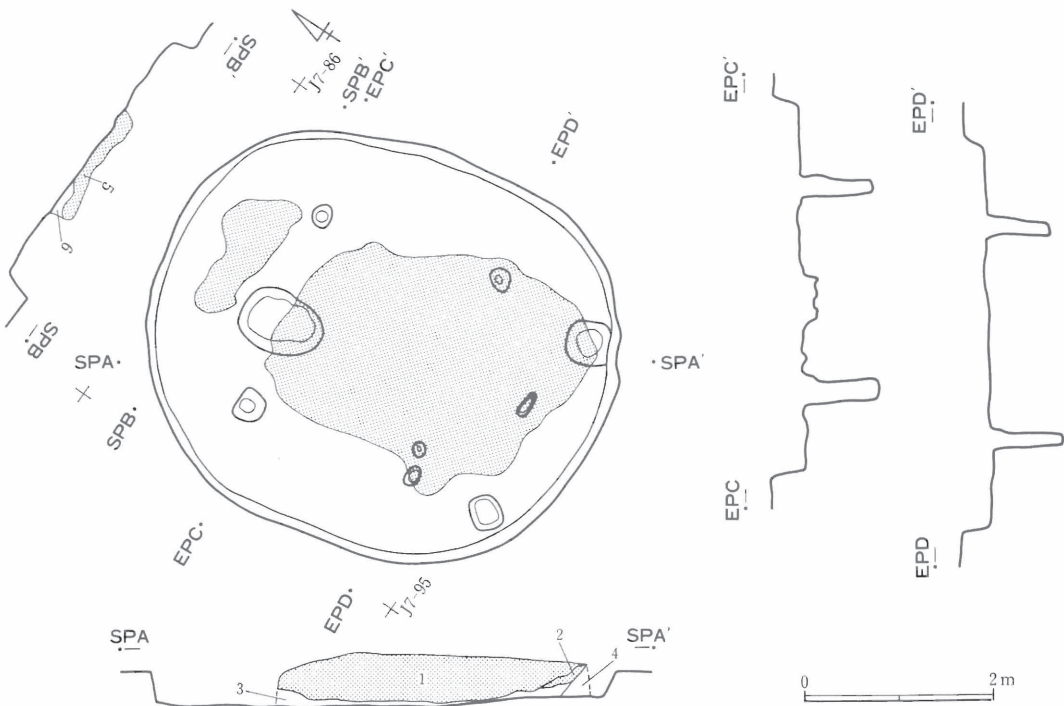
III 貝層が堆積。1層は黒褐色土を含む混土貝層、

2層は暗褐色土に灰を多く含む混土貝層、5層は1層より黒褐色土が多い混土貝層。

IV 貝層の上に暗褐色土や黒褐色土が堆積。土そのものには大きな違いはないが、遺物を多量に含む層と含まない層があることから数回にわたって形成されたと推定できる。

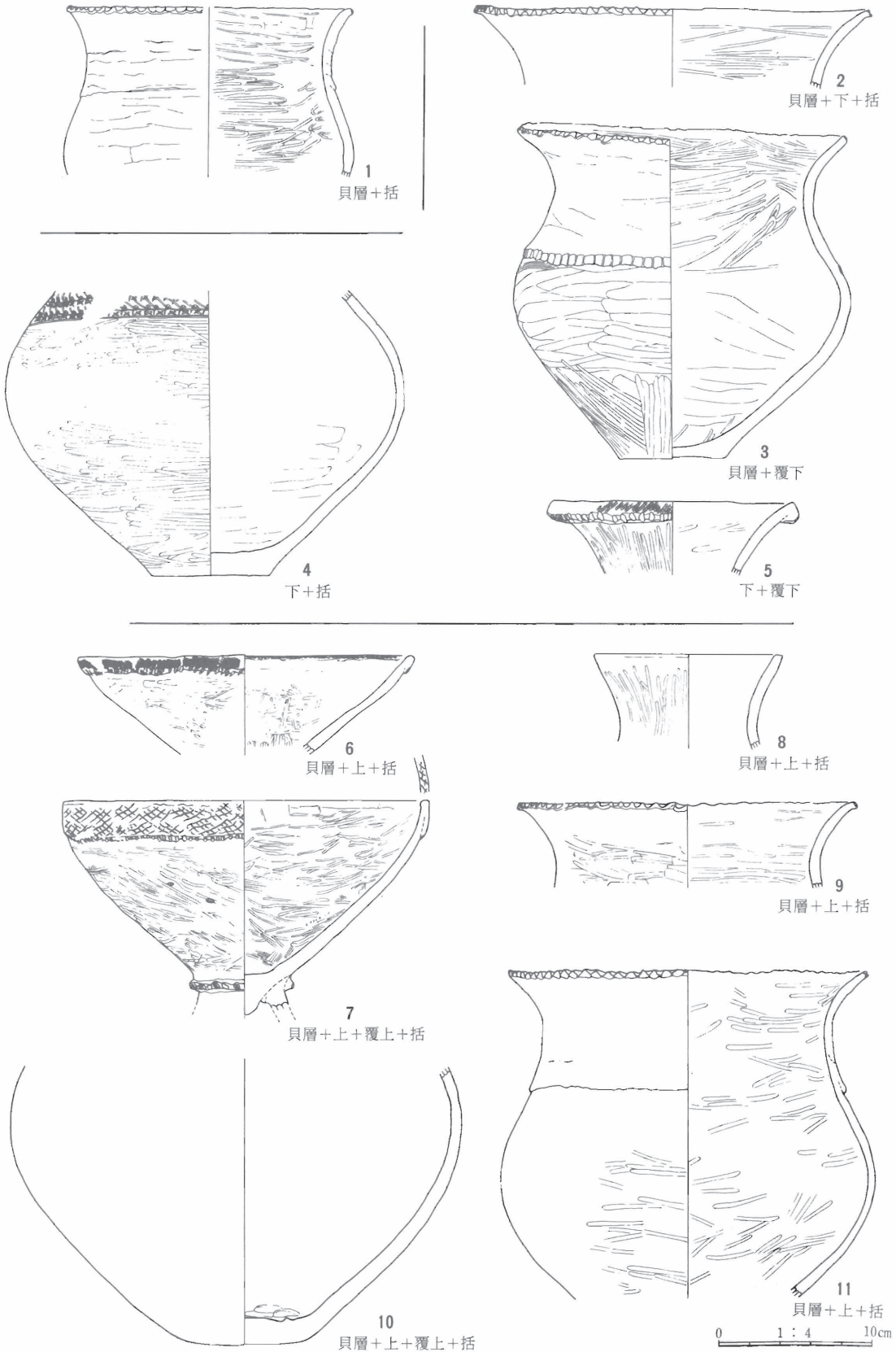
#### (2) 貝層の形成時期

貝層中からト骨が発見されるにおよんで、貝層の形成時期を特定する必要に迫られたため以下の

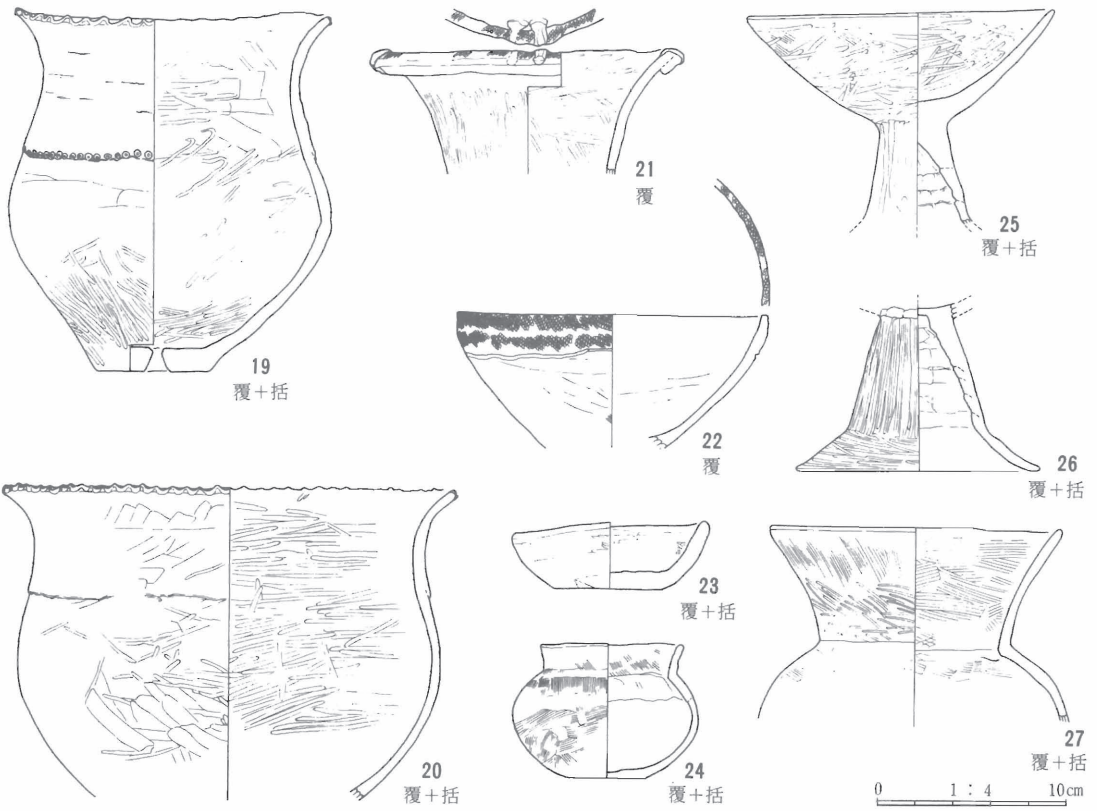
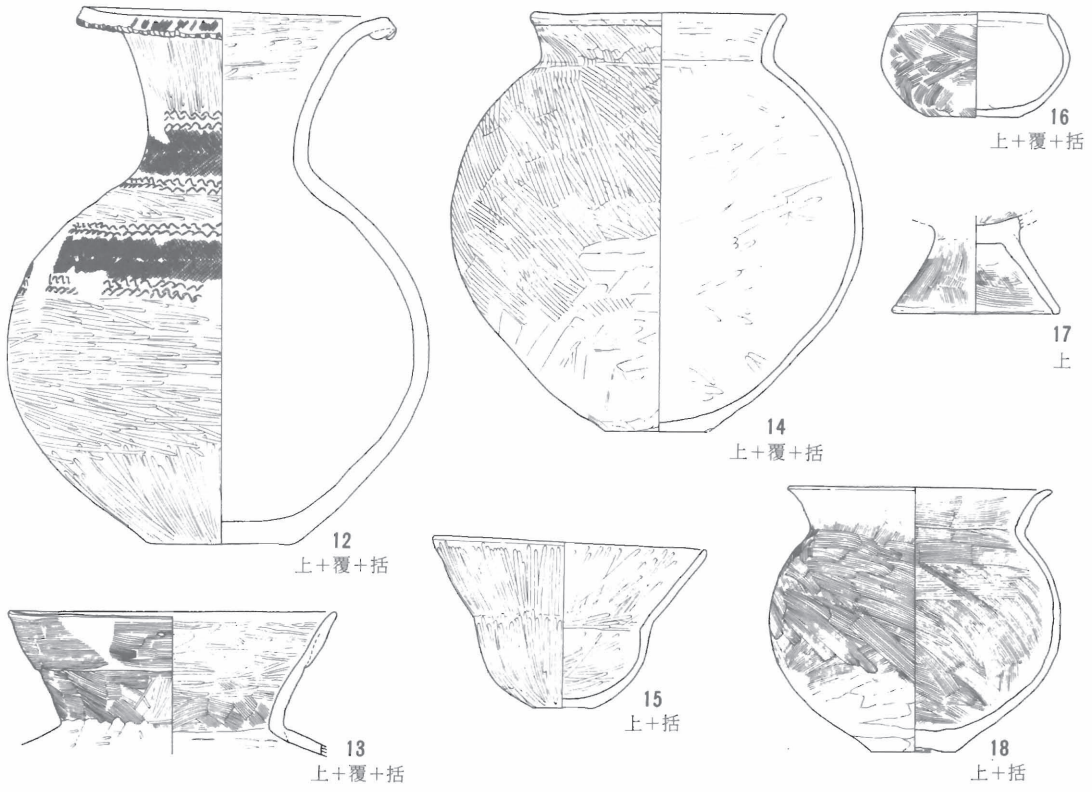


第6図 草刈K区725号住居





第7図 貝層中から出土した土器



第8図 貝層外から出土した土器

ような資料操作をもって貝層の時期を推定した。

まず予想に従って、実測可能な土器を器形・文様・調整技法などを目安に弥生時代後期、古墳時代前期、判別不能の3群に分類して前二者の出土位置と接合関係を検討した。その結果

1 土器が集中して出土する範囲と貝層の分布範囲が一致しない。

2 弥生時代後期の土器の出土層位が上下2層に分けられる。

3 古墳時代前期の土器は上層に偏って出土している。

ことがわかった。これをもとに出土した土器を住居に伴うと思われる覆土最下層の弥生時代後期の一群、覆土上層を中心に出土した弥生時代後期の一群、同じく覆土上層を中心とする古墳時代前期の一群の3つのグループに分けた。

次に貝層の形成がこれら3群の土器のいずれかに伴うのか、全く別のものであるかを検証するために貝層内の土器を抽出することにした。貝層中の遺物を抽出するにあたっては二つの条件を設定し、いずれかを満たしている物を貝層中出土の遺物として取り扱った。

1 遺物台帳に「貝層内出土」の記載があるもの。

2 図面上において貝層中から発見されたと推定できるもの。具体的には平面位置が貝層の分布範囲内に収まるものでなおかつ遺物の出土した高さが貝層の上面および下面レベルの範囲内に収まるもの。ただし遺物の出土地点に貝層の上下面の高さの測点がないものは最も近い測点のレベル値をもとに、周囲の状況を参考にして判断した。それでも判断が難しいものは貝層外出土とした。

こうして抽出した遺物を検討した結果

1 貝層中から発見された土器は弥生時代後期のものに限られる。

2 住居に伴うと考えられる最下層のグループと接合関係がある。

3 一方、覆土上層を中心に出土した弥生時代後期の一群とも接合関係を持つ。

4 ただし覆土上層と覆土下層の土器どうしは接合関係がない。

という所見を得た。これと覆土の内容から貝層の堆積時期は住居廃絶後の弥生時代後期の可能性が高いと推定した。

### (3) 出土土器 (第7、8図)

出土した土器は破片数で約1,650点にのぼる。このうち実測可能なものは40個体ほどあるが今回は27個体を掲載した。また貝層中から出土した土器は85点ある。

なお第7、8図の土器番号の下の略号は以下のような出土層位を表している。

貝層 貝層 (覆土の内容Ⅲ)

上 貝層の上に堆積した覆土 (覆土の内容Ⅳ)

下 貝層下に堆積した覆土 (覆土の内容Ⅰ、Ⅱ)

覆上 貝層堆積後に形成された覆土 (覆土の内容Ⅳ)

覆下 貝層堆積前に形成された覆土 (覆土の内容Ⅰ、Ⅱ)

覆 貝層外の覆土 (貝層との前後関係は検討していない)

括 出土層位不明

+ 接合関係がある。

1～3、6～11は貝層中の破片と貝層外の破片が接合したものである。4、5は貝層下の覆土から出土した。1は甕で口唇部には工具による押捺がある。頸部にはわずかに輪積み痕が残る。2～5は住居の時期に最も近いと考えられる土器である。甕(2,3)と壺(4,5)がある。4は胴上半に一条の沈線で区画された文様帯があつて中にはかなり変形した撚り糸文?が施文されている。5の口縁部縄文は単節LR。6～11は覆土上層と接合した一群で高坏(6,7)、壺(8,10)、甕(9,11)がある。高坏は2点とも折り返し状の口縁を作り口唇端部と折り返し部分に文様(6がLRの単節縄文、7は網目状撚り糸文)を施している。また折り返しの下端は棒状工具による刻み目がある。1と2、3と9、11の3グループ間に積極的な時期差を見出すことはできない。

12～18は貝層上の覆土から出土した土器で弥生時代後期(12)と古墳時代前期(13～18)が混在する。12の壺は頸部と胴上半部に2条のS字状結節文区画と単節LR原体による羽状縄文からなる文様帯がある。口縁端部の縄文も単節LRである。13の壺の口縁部にはモミ痕が認められた(この他にもモミ痕の付いた破片を1点確認している)。

19～27は貝層外の覆土中から出土したもので、やはり二つの時期の土器が混在している。19は甕を利用した甕で底部に焼成後の穿孔が1つある。

輪積み痕はほとんど消されているが最下段に細い竹管様の工具を刺突して刻み目風の文様をつけている。21も壺で口縁端部にはかなり崩れた棒状の貼り付けが2本1単位で残っている。地文は単節LR。22は鉢あるいは高杯の坏部。単節RL原体による二段の斜縄文の下に1条の横位沈線を施す。口唇端部も同一原体と思われる。

## 6. 出土したト骨について

ト骨の出土例については、神澤勇一氏による詳しい研究の成果がある(神澤1976、1987、1990)。

ここでは、神澤氏がまとめている弥生時代のト骨の特徴のいくつかの項目について、今回報告する2例の観察結果と若干の考察を今後の研究のためにつけ加えておきたい。

**焼灼の形式と灼痕の形状** 弥生時代のすべての例に共通する神澤氏の「第II形式」の特徴をよく備えている。けれども「骨面を一部鋭利な刃物(刃子状鉄製工具と推定)で僅かに削る(神澤1987)行為はみられなかった。灼痕の形状は、円形ないし楕円形であり、中心は黒く焼け、周辺が茶褐色に焦げた同心円状になっているものが多い。中心部の長径が2～3mm、周辺部の長径が5～6mmのものが多い。これらも「第II形式」の一般的な特徴である。なお、焼けひびについては、発掘・水洗後の乾燥によって新たに入ったひびと区別がつきにくいため、実測しなかった。

**人為的な破碎の痕跡** 2点とも明らかに人為的に破碎されたといえる部分はなく、骨の保存状態の悪いところで終わっている。寛骨の例は欠損部分は少なく、肩甲骨例もごく接近した部分で破片がみつまっていることからみれば、いずれも完形に近い状態で廃棄された可能性が高い。

神澤氏は出土例の多くが人為的に破碎されているとして、これを「ト占終了後に神性を払拭したことを物語る」(神澤1987)ものの一つとみている。今回の2例は、おそらく破碎されていないけれども、それ自体が神性を払拭したことを否定する材料になるわけではない。

**ト骨の材料** ニホンジカの肩甲骨は、最も一般的に用いられた部位である。一方、寛骨を使ったものは東京都文京区向ヶ岡遺跡の1例に限られるようであり、2例目の発見である(註5)。

**出土状況と伴出遺物** 神澤氏が神性を払拭した

ことの証拠としてもう1つあげているのは、ト骨が「貝塚、溝状遺構等の中に一般生活廃棄物と共に捨てられている」点である。今回の例でも、貝層(貝塚)のなかに食糧残滓や骨角製品、土器片などとともに入っていたことは共通している。ただし、前節で述べたように、貝層に入っていた鳥獣骨がきわめて多くの種から成っていたことをみると、この貝層を簡単に日常的生活廃棄物と決めることはできないのではないだろうか。ただし、「非日常的」といっても、食生活からみた場合の恒常的な食事でなかった、といったものから「饗宴・饗食」などの儀礼まで様々なかたちを推定し得る。したがって、貝層が非日常的な廃棄物である可能性を指摘できたとしても、それがト骨を使った儀礼に結びつくとか、ト骨自体の性格を追究するための情報となるとは限らない。

**周辺での発見例** 県内でこれまでに発見された弥生時代のト骨には市原市菊間遺跡の3例(註6)と千葉市城の腰遺跡の1例があり、いずれもニホンジカの肩甲骨を利用している。この2つの遺跡は草刈遺跡からそれほど遠くはなく、とくに菊間遺跡は村田川の低地を狭んだ対岸の互いの集落を見渡せる位置にある。ただし、両遺跡ともト骨は弥生時代中期の遺構から発見されており、今回の例とは時間的に若干の隔りがある。

## 7. まとめ

貝サンプルを水洗しているときにト骨という目立つ遺物を発見したことがきっかけになって、一部の整理作業を先行して行う機会を得た。その結果、たった1軒の住居の分析からきわめて多くのことがわかることを改めて思い知ることになった。

ト骨をはじめとした獣骨や骨角製品は、当遺跡の弥生集落の実態を解明する上で、新しい研究分野をつけ加えることになった。周辺地域ではこれまで貝層の内容を検討した例が少ないので、当住居の貝層の多種多様な遺物の組成の意味を考えるためには、比較するための材量がいささか不足している。例えば、廃棄物が日常か非日常かという問題にしても、今のところごく単純な想定を述べることはできない。しかし、幸いなことに当遺跡では他に弥生時代の貝サンプルがいくつか採取されている。これからこれらの問題を解明するに当たって、今後実施する予定の貝サンプルの分析

にかかる期待は大きい。

一方、単純な一括遺物に見えた弥生時代後期の同一型式の土器も、貝層を介在として数次にわたる異なる行動の結果だったことを知ることができた。

草刈遺跡では全時期を合計すると2000軒を超える住居を検出している。膨大な資料をかかえて、今後残された時間のなかで当住居のような貴重な情報を失わずに報告していくためには、かなり工夫が必要であろう。整理計画を考えていく上で、今回の経験を活かしていきたいと思う。

最後に西本豊弘先生には今回に限らず、日頃から動物骨の鑑定や貝塚の整理方法などに関してお世話になっており、明記して感謝の気持ちとしたい。また、発掘から資料整理、写真撮影、文献の収集等にあって、立和名明美、大谷弘幸、堀越知道、安宅仁志、関口達彦の各氏にご協力とご助言をいただいた。感謝の意を表したい。

## 註

- 1) 遺物整理の段階では、貝層内では土器や動物骨の入り方も全体にランダムに入っていることが確かめられた。おそらく、あらかじめ貝と土が混ざった状態で廃棄されたものである。
- 2) ウミナ属についてはウミナとイボウミナがあり、22種にはこの2種を含んでいる。ただし、選別・集計作業では一括してあつかった。タニシ科はおそらくマルタニシばかりと思われたが、オオタニシ等との区別が難しいため、科までを示した。なお、イシガイ科としたものは、マツカサガイとイシガイの区別がはっきりしなかったものである。今のところイシガイとわかるものはみられない。

- 3) 当センターで長く発掘・整理を実施している千葉県東南部地区と市原千原台地区では、村田川下流域の縄文早期から中近世に至る各時代の貝層がみつかり、サンプルを少しずつ採取している。今後整理作業がすすめばこの水域での魚介類の利用の変化（漁業史）がかなり明らかになるであろう。
- 4) 縄文時代の貝塚ではオオタニシが多いのに対し、弥生時代には水田開発とともにマルタニシが増加した可能性が指摘されている（黒住・岡本1994）。当住居出土のタニシがマルタニシであるかどうかは、今後確認したい。
- 5) 原資料を確認できなかった。神澤1990でシカの腰骨1となっているものである。弥生時代のト骨116例中唯一発見されていたものである。
- 6) 当遺跡と菊間遺跡は骨角製品を数点伴っていることも共通点としてあげることができる。骨角製品は生業活動や道具の素材としての骨や角の利用の実態を知る手がかりとして貴重であろう。

## 文献

- 黒住耐二・岡本正豊1994「千葉市の貝類Ⅱ－貝類相に関する中間報告Ⅰ－」『千葉市野生動植物の生息状況及び生態系調査報告Ⅱ』
- 金子浩昌・忍澤成視1986『骨角器の研究 縄文篇Ⅰ』
- 神澤勇一1976「弥生時代、古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」『駿台史学』38
- 神澤勇一1987「日本のト骨」『考古学ジャーナル』281
- 神澤勇一1990「呪術の世界」『弥生人とまつり』考古学ゼミナール
- 菊池真太郎ほか1979『千葉市城ノ腰遺跡』
- 千葉県都市公社1975『菊間遺跡』